



墨梅图 张（梁川）红兰（1804-1879）

2. 張（梁川）紅蘭筆《墨梅図》 付《李衍写竹図》

墨梅図（図版Ⅱ） 張（梁川）紅蘭（1804-1879） 明治5年（1872）10月以前 69歳以前

紙本墨画 1幅 法量132.0×52.6cm

款記「五里十里香世界 萬家千家雪樓台 東君稅駕何其早 臘月初頭花盡開
紅蘭張氏詩畫」

印章「張氏景婉」（白文方印）、「道華」（朱文方印）、遊印「黃裳」（朱文方印）

箱蓋表「紅蘭女史看梅詩畫 壬申冬十月鑑 六十九姫紅蘭」

「張氏景婉」（白文方印）、「道華」（朱文方印）

平成28年の秋、縁あって張紅蘭の作品を集中的にたくさん調査する機会に恵まれ、紅蘭が20歳前後より亡くなるまでの50余年、画家としても注目すべき人生を送っていたことに改めて驚嘆した¹。その成果をもとに、紅蘭の絵画制作の全貌については近々別稿を発表する予定にしているので、この稿では、2016年度に香雪記念資料館の収蔵品となった《墨梅図》と、2016年の科学研究費（研究代表者：仲町啓子、研究課題：19世紀日本の女性南画家の移動と交遊圏、課題番号16K02277）で研究資料として購入した《李衍写竹図》について簡単に解説を加えるのみにする。なお、紅蘭の伝記に関しても、改めて考察したいと考えているので、ここでは省略する²。

《墨梅図》（図版Ⅱ）

本図には、梅樹と岩のほかに靈芝が描き添えられ、何らかの祝賀の意を込めて制作された事情を伺わせている。枝はいずれも弾力のある伸びやかな線描で描き出され、それらの線的な動きによって上下左右の余白に緊張感が生み出されている。画面右上と左下にバランスのとれた効果的な余白を作り出すために、自賛は左端のやや窮屈なスペースに押しやられている。その七言絶句は、紅蘭が江戸滞在中の弘化2年（1844）12月、夫・星巖の弟子・小野湖山（字：懷之、1814-1910）と鱸松塘（字：彦之、1824-98）を伴って舟に乗って梅見に出かけた折の「看梅八首」のうちの一詩で、『紅蘭遺稿』上に収められている。この詩を紅蘭は気に入っていたらしく、詩のみを書いた書幅も残っている³。次に賛を示す。

「五里十里香世界 萬家千家雪樓台 東君稅駕何其早 臘月初頭花盡開」

ただし『紅蘭遺稿』では「千家萬家」となっているので、後に推敲したのかもしれない。意識すると「辺り一面に梅の香が漂い、家々に花びらが散るようすはまるで雪のようだ。春が何と早く来たものか。12月初めというのにもう梅は尽く開いている」。『梁川星巖全集 第4巻』の著者・富長覺夢は、亀戸天神を訪れたのだろうと推測している。時に紅蘭は42歳であった。

ところで、本図が納められた桐箱の蓋表（挿図1）には、「紅蘭女史看梅詩畫」の題とその下に「壬申冬十月鑑 六十九姫紅蘭」の款記と「張氏景婉」白文方印と「道華」朱文方印が捺されている。その書と印章は紅蘭自身のもの判断でき、「墨梅」ではなく「看梅詩畫」と題したのも『紅蘭遺稿』所収の詩の題と符合している。明治5年（1872）、何らかの理由で69歳の紅蘭が箱書きを頼まれたものであろう。従って制作の下限は、明治5年10月となる。

次に、印章について述べたい。《墨梅図》の画面に捺された「張氏景婉」と「道華」印（挿図2）は、最晩年の71歳から75歳の年記のある4作品に使用された印章と同印（表1のB-2とハ）である。調査した作品の範囲内ではあるが、最晩年期の上記4作品以外に紅蘭画上で同2印を見出すことはできなかった⁴。しかも、本図の印章がほぼ完璧で、欠けもなく且つ印つきも良いのに比して、70歳代の作品では印の周囲に欠損が見られる。印の状態から見て、本図がそれらに先行することは間違いなく、ほぼ2印の使い始めの頃と判断される。また晩年期には遊印を捺することが多く、上記4作品のうち3作品とは、「黄裳」の遊印（挿図3）も同じである

⁵。いっぽう、箱に捺された「張氏景婉」と「道華」印は、嘉永3年(1850)47歳の紅蘭が制作した《墨梅図》(個人蔵)と2印とも同印(表1のB-1とロ)である。印章から判断しても、本図は69歳頃あるいはそれより若干遡る時期の作と考えて間違いなさそうである。

画風の詳細については、後の紅蘭論に譲るが、ここでは晩年期の画風の傾向を示している点だけを簡単に述べておこう。本図とよく似た構図の作品に《墨竹梅図》(岐阜市歴史博物館蔵、挿図4)がある。夫・星巖の賛があり、「張氏紅蘭」の落款に「張氏景婉」と「道華」印が捺されている(挿図5)。2印は本図の印とも本図の箱に捺された印とも別印(表1のA-1とイ)である。落款の「張」の字の書き方、特に弓偏が、次に述べる《李衍写竹図》や31歳の紅蘭が江戸で制作した《秋卉舞蝶図》(実践女子大学香雪記念資料館蔵)と近く、同時に初期作品の謹直な楷書体から後年の行書体へと向かう傾向が表れ始めているので、30歳代中頃から40歳代初め頃の作品と推定しておきたい。

両図はちょうど線対称に反転したような構図をとっているため、一見すると似ているようにも見えるが、制作意図にはかなりの違いがある。《墨竹梅図》では、岩陰から梅樹が立ち上がり、背後に竹が、下部に春蘭が描かれる。梅と竹を重ねるように描き、さらに下に蘭を添えることによって、画面はやや平板になっているものの、他方華やかさを増しているのも事実である。さまざまな線描が使い分けられているのも面白い。竹の輪郭を括る細い線描、梅の幹を描く太めの線、岩の面的な皴法、蘭の柔らかな曲線、などが細やかに描き分けられている。いっぽう本図は、岩を斜めに構図するとともに、梅の枝が空間的に的確に配置され、幹の線描にも張りがあるって、空間(余白)の生かし方という点では、本図に一日の長がある。本図のような勢いのある線描で梅の枝を描くのは、嘉永3年(1850)冬(47歳)の《墨梅図》(個人蔵)に先例があり、紅蘭が比較的后年に目指した世界であった。

ところで、《墨竹梅図》に描かれているような、輪郭を細い線で描くいわゆる「勾勒」の竹は、後年、紅蘭が多数描いたいわゆる墨竹とは別種の描き方である。紅蘭がこの画技を取得した経緯を語る興味深い資料に《李衍写竹図》がある。次に述べるように、この作品の制作もかなり若い頃と推定でき、その点も《墨竹梅図》の制作期を若い時期と推定する根拠の一つになっている。

《李衍写竹図》(挿図6)

大小10本余りの竹を、淡墨と濃墨を使い分けて前後関係を表し、風に吹かれた風竹のさまを描き出している。筆遣いは実に慎重で、葉の一枚一枚を丹念に写し取ろうとしている。ただ、添えられた岩の描写はやや拙く、紅蘭が花鳥画系に比べて、山水画系の習得がやや遅れていることを示唆している。こうした竹の学習が、左記に述べた《墨竹梅図》(岐阜市歴史博物館蔵)などに応用されたものと思われる。ただ《墨竹梅図》では岩の描き方にかなり進歩が見られ、紅蘭がこの方面にもかなり研鑽を積んできていることを表している。《李衍写竹図》と《墨竹梅図》の制作年には数年の隔たりを想定したい。

本図は、大雅堂六世を名乗った霞邨(1953年3月没)の箱裏書⁶から、昭和9年(1934)までは紅蘭の出身地である大垣城下に伝わっていたことが判明する。画面右上の「大徳庚子秋七月李衍」という年記は、原因が大徳4年(1300)7月に制作されたことを伝えている。「息齋」と「李衍仲賓」の2印も筆で写し取られている。紅蘭が中国・元代の文人画家・李衍(1244-1320)の作品を模写したという事実は興味深い。原因の真贋を確かめるすべはないが、李衍筆と伝えられる竹図は日本にも室町時代には伝わっていた。そうした例のひとつである《竹石図》(三の丸尚蔵館蔵)は、織田信長の父・信秀(1510-51)から名古屋市万松寺に寄進されたもので、江戸末に中林竹洞(1776-1853)が模写したと伝えられている⁷。李衍の著書『竹譜詳録』は、宝暦6年(1756)大坂の版元から和刻出版されているので、李衍の竹は当時かなり著名であったはずである。紅蘭が熱心に模写したのも、日本におけるそうした李衍の鑑賞史が背景にあったからであろう。

左下に「張氏景姚摸」の署名と「梁」「張」の朱文連印(挿図7)が捺されている。紅蘭は「景婉」の前に「景姚」と名乗っていたことが、今回の調査によって判明した。「婉」も「姚」もほぼ同じような意味だが、より意味にふくらみのある「婉」に途中で変えたい。「姚」から「婉」への変名の時期を特定することは難しく、

目下のところ確実に言えるのは、文政7年(1824)2月(21歳)の《群蝶図》(個人蔵)⁸では「張氏景姚」と署名しているが、嘉永3年(1850)冬(47歳)の《墨梅図》(個人蔵)では「張氏景婉」の印章を使用しているため、その間ということになる。予想としては「景姚」の署名や印章を有する作品は少ないので、比較的早くに、おそらく30歳代中頃までには変えていた可能性が高い。

《李衍写竹図》に捺された「梁」「張」の朱文連印は、天保5年(1834)4月に31歳の紅蘭が江戸で制作した《秋卉舞蝶図》(実践女子大学香雪記念資料館蔵)⁹と同印であり、署名の書体(特に「張」の字の書き方)も近いので(挿図8)、《李衍写竹図》の制作は、30歳前後(1830年代中頃)と推定しておきたい。

使用印について

最後に、代表的な印章について、その概略を述べておく。「張氏景婉」白文方印と「道華」朱文方印は紅蘭が最も多く使用した印章で、表1に示したように、それぞれ5種類を確認することができた。なお、「道華」には他に関防印として用いられた朱文方印(連印)がある。紅蘭は画中に通常2つの印(例外的に3印の場合もある)を捺しているが、必ず同じ組み合わせとなっているのも特徴である。「張氏景婉」印・「道華」印の順でA-1とイの組み合わせは、本文中で30歳代中頃から40歳代初め頃の作と推定した《墨竹梅図》(岐阜市歴史博物館蔵、挿図5)など、B-1とロは、嘉永3年(1850)冬(47歳)の《墨梅図》(個人蔵)や《墨梅図》(実践女子大学香雪記念資料館蔵)の箱書などに見られる。B-2とハは《墨梅図》(実践女子大学香雪記念資料館蔵)の画面に捺されたほか、71歳、73歳、75歳の年記のある作品に用いられている。Cとニは72歳の年記を有する作品に捺されている。なお、A-1とA-2及びイ-1とイ-2は、ひじょうに良く似ているが、いちおう別印と考えてみた。「張氏景婉」印は、A-1(約17×17mm)、B-1(約21×21mm)、B-2(約26×26mm)、C(約35×35mm)と、「道華」印は、イ(約15×17mm)、ロ(約21×21mm)、ハ(約26×27mm)、ニ(約34×35mm)としだいに大きさを増しており、捺されている画面も考慮に入れるなら、各印はこの順番で制作されたものと思われる。

《李衍写竹図》に捺された「梁」「張」の朱文連印(約18×10mm)は、おそらく1種類しかなかったものと推定される。その他、若い頃(10代末から30代初め)に用いたと思われる「張氏景姚」、「月華女史」、「紅」・「鸞」の連印なども1種類であろう。「鍼鏡餘事」印には、若い頃に上記の「梁」「張」の朱文連印とともに用いた白文方印(約15×15mm)と、後年「張氏道華」白文方印(約26×25mm)とともに捺した朱文方印(約25×25mm)がある。これらの例から見ると、年齢を重ねてゆくにつれて、印章の大きさも若干ながら大きくなっていったように思われる。

(実践女子大学香雪記念資料館 館長 仲町啓子)

註

- 1 平成28年12月4日、岐阜県大垣市にある奥の細道むすびの地記念館にて、「張(梁川)紅蘭と19世紀の女性画家」という題で講演する準備に、多くの実作品の調査を行った。同講演の機会を与えて下さるとともに、大垣市における作品調査のご手配等に多大なご尽力を戴いた、同記念館の学芸員山崎和真氏にはたいへんお世話になりました。改めて心より御礼申し上げます。また、作品調査を快く御承諾戴きました各ご所蔵家様各位にも、衷心より御礼申し上げます。
- 2 伝記に関しては、下記の論考が詳しい。
梁川星巖全集刊行会編『梁川星巖全集 第4巻』(梁川星巖全集刊行会、1958年)
伊藤信『梁川星巖翁一附紅蘭女史』(象山社、1980年)
- 3 註2の『梁川星巖全集 第4巻』の口絵。
- 4 《墨竹図》(稲津家伝来、71歳の作)、《松竹梅図》(奥の細道むすびの地記念館蔵、73歳の作)、《墨竹図》(稲津家伝来、75歳の作)、《山水図》(岐阜市歴史博物館蔵、75歳の作)の4作品。
- 5 註4の4作品より《墨竹図》(稲津家伝来、71歳の作)を除く3作品に「黄裳」の遊印が捺される。なお上記の《墨竹図》と《竹石図》(奥の細道むすびの地記念館蔵、72歳の作)には、「聊逍遙」の遊印がある。
- 6 箱裏書は、「張紅蘭女史唐畫摸寫白描竹石之圖 直筆而稀見逸品亦甚難得者也 昭和甲戌初冬日於西濃巨鹿城下客次 6世大雅堂霞邨馨」。巨鹿城とは大垣城のことである。
- 7 田中一松、米澤嘉圃、川上涇編『東洋美術 第1巻 絵画』(朝日新聞社、1967年)第81図の解説。
- 8 白水正『定本・岐阜県の日本画〈南画編〉』(郷土出版社、1990年)の第35図。
- 9 三戸信恵「圖版 梁川紅蘭筆 秋卉舞蝶圖」(『國華』1397号、2012年)。



插图1
《墨梅图》
箱の蓋表書

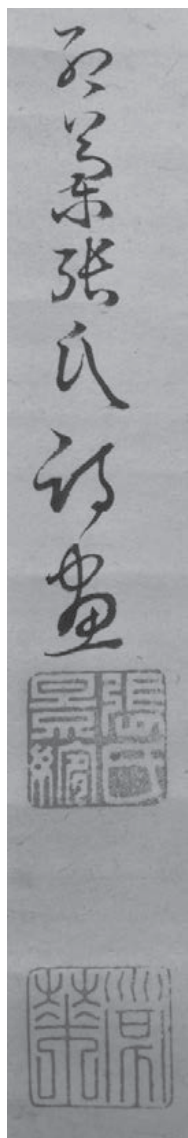


插图2
《墨梅图》
落款印章



插图3
《墨梅图》遊印

插图4
《墨竹梅图》岐阜市歴史博物館蔵

插图5
《墨竹梅图》
岐阜市歴史博物館蔵
落款印章



插图6 《李衍写竹图》

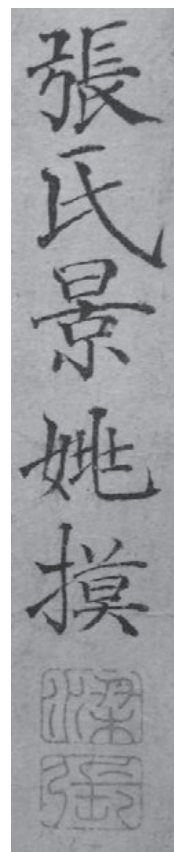


插图7
《李衍写竹图》
落款印章

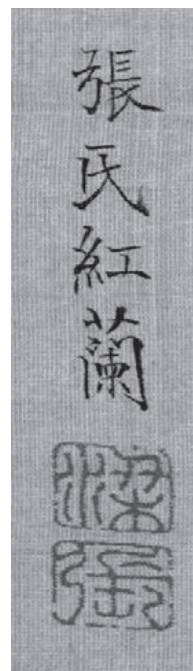



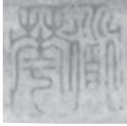

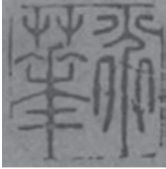





插图8
《秋卉舞蝶图》
落款印章

表1 「張氏景婉」印・「道華」印

「張氏景婉」印	「道華」印
A-1印 	ㄚ-1印 
A-2印 	ㄚ-2印 
B-1印 	口印 
B-2印 	ハ印 
C印 	ニ印 